

日時： 2008年10月10日(金)

場所： 公立はこだて未来大学

「身体社会学と障害者の身体 なぜ身体を語るのか、何を身体で語るのか」

後藤 吉彦

hiko19772000@yahoo.co.jp

・障害学における「身体」の位置

身体の位置づけをめぐって、障害学(ディスアビリティ・スタディーズ)において交わされた議論を概観したのち、発表者の見解を述べる。

1. 「医学モデル」に挑戦した「社会モデル」

障害学の成立および発展は、障害についての従来的な見方(「医学モデル」)に挑戦する「障害の社会モデル」から始まった。社会モデルは、障害者を生き難くしている障害(ディスアビリティ)から、身体の欠損(インペアメント)をいったん切り分けることで、障害を社会問題の俎上に載せることができた。

2. 「身体」の扱いをめぐっての、社会モデルへの批判

社会モデルの功績は大きい。しかし、身体の取り扱いをめぐっての批判もある。(星加 2007; 杉野 2007)

批判 「身体的な経験が語れなくなるのではないか」

インペアメントに向き合う葛藤、感情、経験を語る道を閉ざしてしまう、“マッチョな”傾向への批判。(主に、女性の障害者による問題提起)

批判 「生物学的な身体観・医学モデルを容認するものではないか」

身体社会学()などによって、近年、人間の身体には生物学に還元できない社会的で歴史的な側面があることが指摘されている。そのような議論をスルーしてしまうのは、結果的に、身体あるいは身体についての知識を医学にゆだねてしまい、医学モデルによる身体観を容認する、という批判。

身体社会学について

身体社会学は、人間の身体とは「単なる皮膚と骨、諸器官の集合、医学的驚異などではない」という認識に立って、身体と社会、文化、そして自己が複雑に絡み合いながら、

日時： 2008年10月10日(金)

場所： 公立はこだて未来大学

身体を人間の身体たらしめているプロセスに着目する学問。(Shilling 1993; Synnott 1993=1997; Turner 1984=1999)

3. 後藤吉彦の考え

身体社会学の意義は、単に身体認識(「身体はどこまで自然でどこまで社会的か」)をめぐるものではない。それは現実の問題にメスをいれる批判理論となる。

それによると、現代社会の特徴は、人々の「私的な」事柄(生き方、家庭、日常生活)をターゲットにする権力()が浸透していることである。それは、身体をとおして、人間の生を規格化し、管理・統制する。

このような問題意識をもつならば、障害学が身体に注目すること、そして現代社会が身体をとおして、障害者の生に何をもちたらすのか、議論することは必要である。それはリアルな課題であり、非常に政治的な取り組みともいえる。

権力とは、人々の行為にはたらきかけ、方向付ける力。各自の行動や思考を制御する。それによって影響がおよぶ地域、住人のあいだには、秩序がつくられる。

・現代社会の特徴「生きさせる権力」 フーコーの「生 権力」論

身体社会学にとって重要な思想家の一人、ミシェル・フーコーの権力にかんする議論を参照しながら、現代社会における、身体をとおした障害者の管理や統制について考える。

1. 「死なせる権力」と「生きさせる権力」

フーコーは、『監獄の誕生』(Foucault 1975=1977)や『性の歴史 』(1976=1986)といった著作において、近代社会における権力、統治のあり方の変化を指摘した。それは、「死なせる権力」(死の権力)から「生きさせる権力」(生の権力、生 権力)へ、という変化。

「死なせる権力」(死の権力)

絶対王政の時代における統治がモデル。死の恐怖をもって法令を遵守させ、それによって社会としての秩序を維持する。

「生きさせる権力」(生の権力、生 権力)

近代国家の時代における統治がモデル。誕生から死まで、人々の生を規格化し、管理・統制する。人々は、それに従えば「良く生きる」ことができる規範を内面化し、自主的に秩序をつくる。

2. 「生きさせる権力」がはたらく2つの経路

生 権力(「生きさせる権力」)は、主に以下の2つの経路をとおして、人々の生を掌握する。

身体の規律訓練(学校、病院、監獄、施設などが代表例。今や社会全体に浸透)

人口の管理・調整(性科学、人口統計学、誕生・死亡の登録、出生率コントロールなど)

いずれの経路も、人間を分類して“それに相応しく”生きるように方向付けする。それに従えば、安全、快適で文化的な生活を享受できる。だが、従わない生き方は、「破棄」されてしまう。

3. 「生きさせる権力」の加速化 ターナーの「身体社会」論

ブライアン・ターナー(Turner 1992)は、現代の先進諸国のあいだで、身体の安全や快適さ(「良く生きること」)がますます政治的、文化的、倫理的な争点となる社会、いわゆる「身体社会 somatic society」が出現したと指摘する。「身体社会」では、生 権力の影響がさらに加速化する。

・「身体社会」と障害者の身体

生 権力が浸透し、加速化した現代社会の趨勢は、障害者たちの生にどのような影響をおよぼしているのか。二つの事柄に注目して考える

1. 身体の「正常化」と、障害者/健常者への分類

「良く生きること」を目的とした健康状態の検査や診断、治療や訓練は、人が生まれてから死ぬまで絶えることのない。それは、身体を加工し「正常化 normalize」する。

「正常化」は人を分類するプロセスでもある。「正常化」に失敗する人は、「障害者」へと分類される。分類されたときから、健常者は健常者に“相応しく”、障害者は障害者に“相応しく”生きることが、その人が「良く生きる」ための道になる。

2. 障害者の身体の管理・統制

昨今、日本においても介助の制度化、バリアフリー施設の整備など、障害者にとって安全で快適な(文化的)暮らしを確保する方向へと進んでいる。しかし、その流れとともに、

より高度な生の管理・統制がすすんでいることに注意が必要である。

3. 生 権力に抗うことの難しさ

生 権力が網の目のように行き渡った現代社会では、身体をもとにして人の分類がおこなわれ、その分類に従った生き方をおこなうように、行為・行動が管理・統制される。分類や管理・統制は、ひとが「良く生きる」ために行使されるのであり、それに対して抵抗することは難しい。なぜなら、誰・何に反対するのか、明確な“敵”がみえないし、なぜ反対するのか、その理由はみつけにくい。なぜ良く生きることに反対するのか。なぜ、あえて安全や快適さを損なうのか。

・「人間をつなぐ身体」を語る

生 権力に抵抗することは難しい。だが、分類に従った生き方に違和を感じる人々の存在を無視すべきでない。発表者は、そのような人の存在を真摯に受けとめたい。そして、身体による人間の分類に対して問題提起し、さらに、それを不安定化させる試みとして、身体が人を分ける(分類する)のではなく、つなぐことに注目し、それを積極的に語る。

1. 境界侵犯する身体

D. ハラウェイ (Haraway 1995=2001) は、現代の科学、医療、電子工学などの先端技術が、過去には自明であった人間と動物、機械と生物、物理的なるものと物理的ならざるものとのあいだの境界を、ことごとく曖昧にしてしまったことをあげ、「わたしたちはすでにみなサイボーグなのだ」と主張する。ハラウェイの主張が注目し値するのは、それがポスト・ヒューマン的な身体の実現を予言していたからではなく、それが身体による分類の“混乱”を示唆しているからである。他者や外側世界と接触する(接触してしまう)身体は、時として自分のアイデンティティさえ混乱させるような「開かれた」側面を備えている。身体は分類の境界を侵犯する。

「介助者 = 手足」論

境界侵犯する身体の例として、障害者運動から生まれた「介助者 = 手足」論を読み直すことができるのでは? 字義どおり「介助者が障害者の手足になること」ととらえれば、介助をともなう動作の最中において障害者と介助者の身体は境界が侵犯されていることが発見できる。

2. 「傷つきやすさ」の普遍性

日時： 2008年10月10日(金)

場所： 公立はこだて未来大学

ターナーは次のように論じる (Turner 1993, 2001a, 2001b, 2001c)。人間は、すべての生物と同様に、傷つき、老化し、病にかかるような身体をもっている。くわえて人間は、他の動物と違い、確固たる本能や生活環境を持たないため、身体の安全は社会や文化によって補完されなければならない。つまり、人間とは根本的に「傷つきやすい vulnerable」存在である。この傷つきやすさゆえの苦痛は、普遍的な性格をもつ。そして、同じように傷つきやすさゆえの苦痛を経験する他者への共感を可能にする。

ターナーが主張する、「傷つきやすさ」にもとづく人間の普遍性という考えは、身体による人間の分類に疑問を投げかけるものであり、重要である。しかし、現状では、私たちはその考えを前提にはできない。なぜなら、傷つきやすさは、特定の人間の事柄と考えられたり、あるいは「人間」概念が排他的であったりするからである。したがって、「傷つきやすさ」の普遍性は、語ることによってこれから構築していかなければならない。

この試みにとって、「障害の普遍化論」(アーヴィング・ゾラ [Zola 1989]) や、優性思想を批判する中で「人間」概念の排他性を問題化してきた障害学は、とりわけ大きな役割を果たすだろう。

おわりに

人をつなぐ身体を語ることは、身体によって人を分け(分類し)、それに“相応しい”生き方を求める生 権力に対して、生きながら(生を「破棄」しないかたちで)抵抗する手段といえる。

参考文献

- Foucault, M., 1975, *Surveiller et Punir: Naissance de la Prison*, Gallimard (= 1977、田村俣訳『監獄の誕生—監視と処罰』新潮社)
- , 1976, *La Volonté de Savoir: Volume 1 de Histoire de la Sexualité*, Gallimard (= 1986、渡辺守章訳『性の歴史□ 知への意志』新潮社)
- 後藤吉彦 (2007) 『身体社会学のブレークスルー—差異の政治から普遍性の政治へ』生活書院
- Haraway, D., 1985, “Manifesto for Cyborgs: Science, Technology, and Socialist Feminism in the 1980s,” *Socialist Review*, 80, 65-108. (=2001、小谷真理訳「サイボーグ宣言—一九八〇年代の科学とテクノロジー、そして社会主義フェミニズムについて」異孝之編『サイボーグ・フェミニズム〔増補版〕』水声社、27-143.)
- 星加良司 (2007) 『障害とは何か—ディスアビリティの社会理論に向けて』生活書院

日時： 2008年10月10日(金)

場所： 公立はこだて未来大学

Shilling, C., 1993, *The Body and Social Theory*, Sage.

杉野昭博(2007)『障害学—理論形成と射程』東京大学出版

Synnott, A., 1993, *The Body Social: Symbolism, Sex and Society*, Routledge. (=1997、高橋勇夫訳『ボディ・ソシアル—身体と感覚の社会学』筑摩書房)

Turner, B. S., 1984, *Body and Society: Explorations in Social Theory*, Oxford: Basil Blackwell. (=1999、『身体と文化—身体の社会学試論』藤田弘人・小口孝司・泉田渡・小口信吉訳、文化書房博文社)

——, 1992, *Regulating Bodies: Essays in Medical Sociology*, Routledge.

——, 1993, “Outline of a Theory of Human Rights,” *Sociology*, 27(3): 489-511.

——, 2001a, “The Erosion of Citizenship,” *British Journal of Sociology*, 52(1): 189-209.

——, 2001b, “Disability and the Sociology of the Body,” G. L. Albrecht, K. D. Seelman and M. Bury eds., *Handbook of Disability Studies*, London: Sage, 252- 266.

——, 2001c, “The End(s) of Humanity: Vulnerability and the Metaphor of Membership,” *The Hedgehog Review*, 3(2): 7-32.

Zola, I. K., 1989, “Toward the Necessary Universalizing of a Disability Policy,” *The Milbank Quarterly*, 67: 401-28.